

本年度の研究を概観して

副校長 今 嶋 三 郎

平成7年度からスタートした、『生活を楽しむ子』というテーマでの研究も3年目となり、一区切りをつけることとなった。

本校が描いてきた『生活を楽しむ子』の像は、自分自身が生活の主体者として自分なりの考えを持って活動する子の育成である。そのために我々は、子どもたちが現在の学校なり家庭や地域での生活を、その発達に応じて楽しみながら、主体的に送っていくための指導や支援のあり方を研究し、実践してきた。

このテーマで研究実践を始めて3年目である。先般、校内の全体研究会で、「作る」を各学部の共通の切り口として、学部に応じた制作（あるいは製作）場面に視点を当て、授業実践を行った。これまでの子どもたちの活動との比較はできないが、小学部の「めたくり」での、のびのびとしていかにも楽しそうな笑顔一杯の活動の中で、新しい活動を見つけ出している姿。中学部の「劇の小道具作り」で、生徒が工夫した作品を自らが友だちに伝えている姿。高等部の「木工芸」で、自分の作りたいものを目的を持って、教師に支えられながらも黙々と製作している姿、これらを見ていると、悩んだり苦しんだりしながらも、作ることを楽しんだり工夫したりして、ゆっくりではあっても方法や技術を少しずつ身につけていっている姿が見受けられた。また、子ども一人ひとりに応じた、教官のきめの細かい指導や支援は、過去3年近くにわたる指導や研究実践により（長い試行錯誤を含めて）、少しずつではあるが、個々の特性を踏まえたものとなってきている。これらの取り組みの評価は、今後の子どもたちの成長（卒業後に、生活を楽しんで毎日を充実させている姿）を見て検証されるものであろうが、現在の学校生活の中での『生活を楽しむ子』の姿が、必ずや将来の子どもたちの発達に成果として現れてくるものと確信している。

先般発表された教育課程審議会の「中間まとめ」では、週当たり3単位時間程度の「総合的な学習の時間」（仮称）の導入が示されたが、これは、自らの興味関心に基づき、実体験、体験的な学習、問題解決的な学習が、各学校の創意工夫を十分発揮しながら実践されることを重視している。この提案は、「生活単元学習」や「作業学習」等で、体験を重視しながら、今の生活を楽しみつつ、将来をたくましく生きていくための基礎を培っていかうとしている養護学校の実践（本校の研究実践）にその源流を見るように感じる。そう考えると、我々の実践研究は、これからの教育の方向性を踏まえたものであると自負できるのではなかろうか。

各学部で、発達や障害に応じた実践を展開し、それなりの成果を得てきたと思うが、我々はこの研究が完結したとは考えていない。次年度以降、本テーマをさらに追求するか、新たなテーマで切り込んでいくか、その方向性は定まっていない。しかし、子どもたちの学校生活をもっと充実したものとするためには、さらに、この研究を実践的に検討しなくてはならないと考えている。

最後に、本校の研究がより深まり、実りあるものとなるよう、皆様の忌憚のないご叱正やご指導、ご助言を賜わるようお願いする次第である。